

発達障がい

障がい別に具体的な配慮例を紹介します。

※授業においては、科目特性に応じて学生本人と教員が話し合い、
ともに着地点を見つけましょう。

1. 概要

生まれつきの脳機能障がいのため、外界からの刺激の受け止め方（認知）、対人関係や社会的ルール（社会性）、学習、注意及び集中に偏りや問題がある。下記のとおり分類されるが、重複していることも多い。

ASD（自閉症スペクトラム）

見通しをもったり、相手の意図がうまく理解できないことがあり特定の強いこだわりや感覚過敏（におい、光、音、感触）もある。
コミュニケーションスキルに関わる。

ADHD（注意欠陥多動症）

常にどこかが動いており（多動性）、思いついたらすぐに着手したくなる（衝動性）。集中を保つことも苦手で不注意によるミスも多い。
ライフスキルに関わる。

SLD（限局性学習障がい）

本を読んだり、文字を書いたり、計算をしたり等、特定の学習に関わる能力がうまく発揮できない。
ラーニングスキルに関わる。

障がい別の配慮

2. 講義（座学）における配慮例

<ASD>

具体的な大学生活をイメージして計画をたてられないことがあるため

- ・ 相談窓口を紹介する。
- ・ 履修登録の支援をする。
- ・ 卒論指導等の際に綿密に打ち合わせる。
- ・ グループワークの人数や環境に配慮する。

<ADHD>

スケジュール管理が困難なことがあるため

- ・ 一緒にスケジュールを確認し必要に応じ、個別に連絡してフォローする。
- ・ 授業等に関する変更連絡はなるべく早く周知する。一貫して同じ方法での周知を行なう。

<ASD、ADHD>

マルチタスク（話を聞きながらメモをとる等）が困難なことがあるため

- ・ 授業の録画や録音を許可する。
- ・ 配布資料を事前に提供する。

<SLD>

- ・ 手書きが難しい場合に、PC等の使用を許可する。

3. 実技授業における配慮例

- ・ オリエンテーション等で時間をかけて説明を行なう。
- ・ 説明をする際に、文字、絵、図などを用いる。
- ・ シングルタスクからマルチタスクへ段階をつける。
- ・ その他、学生本人がどの程度の動きが可能か、その都度確認しあう。